

A Study on Interruptions in Japanese Conversations

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/4668

氏 名 深 澤 のぞみ

本 籍 東京都

学 位 の 種 類 博士（学術）

学 位 記 番 号 博甲第15号

学 位 授 与 の 日 付 平成11年3月25日

学 位 授 与 の 要 件 課程博士（学位規則第4条第1項）

学 位 授 与 の 題 目 日本語の会話における割り込み発話に関する研究

－日本語母語話者と日本語学習者の言語行動と非言語行動の観察から－

(A Study on Interruptions in Japanese Conversations)

論 文 審 査 委 員 委員長 大 瀧 敏 夫

委 員 鹿 野 勝 彦, 柘 植 洋 一

学位論文要旨

本研究の目的

ことばには、単に情報を伝えるだけではなく、人と人との関係をつくる働きもあると言われている。本研究では、この人と人をつなぐ働きについて、会話に現れる割り込み発話を通して論じていく。

まず日本語の会話における割り込み発話の種類や機能と、これまで検討されなかった視線行動などの非言語行動との関わりに注目して、日本語母語話者同士の会話における割り込み発話の実態を分析する。さらに、日本語母語話者（以下、母語話者）と日本語学習者（以下、学習者）の会話において母語話者が用いる割り込み発話に特に注目して、母語話者同士の会話と比較して考察を行う。本研究は、これらの分析によって、割り込み発話を通して見た会話参加者同士のコミュニケーションの特徴を明らかにし、また、母語話者と学習者のコミュニケーションの特徴を明確にすることを目的とする。

本研究の方法

これまでの研究では、会話における割り込みは、会話の話者交替システムの中で、現在の話し手のターンが完了する直前や話者交替適格箇所付近で、次の話し手たるべき人間が自己選択的に話し手になる場合、または話者交替適格箇所以外の場所で、自分のトピックを展開するための支配と手段として用いる場合に生起すると考えられている。さらに、積極的な会話への関与としても、割り込みが行われるとも指摘されている。

しかし、上述の指摘は主に英語の会話について研究されているものであり、日本語の会話における割り込み発話に必ずしも当てはまるとは限らない。さらに、実際の日本語の会話における割り込み発話は、複雑な側面を持っている。たとえば、割り込み発話とあいづちとの違いといった日本語特有の問題がある。また、割り込みが現在の話し手のターンのどの位置で行われるのか、割り込みの際に話し手と聞き手は交替するのか、割り込みはどのような機能を持つのか、視線行動とどのような関連があるのかなど、多様な側面があり、割り込み発話の一部の特徴だけに注目して分析しても全体像がつかめない。そこで、本研究では、これらの側面を考慮して、実際に行われた友人同士などの雑談に現れる割り込み発話を、1) 早めの発話開始、2) ターン取りのための割り込み発話、3) 差しはさみ、4) 働きかけの割り込み発話、5) ターンの重なり、の5種類に分類し、かつ、割り込み発話と視線行動等の非言語行動とを関連させて総合的に考察した。

本研究では、実際に録音・録画した10組の会話を用いて分析している。具体的には、母語話者同士

の会話4組、母語話者と学習者との会話4組、さらに、比較検討するために学習者と話した母語話者同士の会話2組を収集し、言語行動および非言語行動を文字化して、会話資料とした。この資料から割り込み発話を抽出し、上の割り込み発話の種類に従って分類した。さらに割り込み発話と視線行動との関連、割り込みの機能などについても分析し、会話参加者同士のコミュニケーションの特徴について考察した。

本研究の成果

これまでの研究では、母語話者同士の会話に見られる割り込み発話について、権力的な機能を持つものに注目されがちであった。しかし、本研究に現れた割り込み発話の機能を分析してみると、相手のターンを妨害するようなものはさほど多くなく、相手のターンを継続するもの、支援するものが圧倒的に多いことが確認された。

また、これまで検討されることのなかった割り込み発話と視線行動との関連については、次のようなことが分かった。通常の話者交替では、発言権を取ってターンを始めようとする会話参加者が、いったん相手から視線をはずした上で話し始めることが観察されるが、1) 早めの発話開始、2) ターン取りのための割り込み発話、3) 差しはさみ、の3つの割り込み発話では通常の話者交替と同じように、割り込んだ会話参加者が視線を相手（ここでは現在の話し手）からはずす視線行動を伴っていた。一方、4) 働きかけの割り込み発話における視線行動は、ターンを取る際のような相手から視線をはずす比率があまり多くなく、相手に視線を向けたまま割り込みが行われていることが明らかになった。これは、働きかけの割り込み発話は、聞き手の視線行動のままで行われていることを意味する。

さらに働きかけの割り込み発話では、割り込まれた話し手がすぐに自分のターンの中で応答することも多く観察され、割り込み発話が話し手と聞き手の相互交流を生み、それが大きい会話の流れをつくっていることも明らかになった。

以上のことなどから、割り込み発話は、必ずしも会話を中断して話題を変えさせるような機能として働くのではなく、逆に会話の中での話し手と聞き手の交互交流を緊密にし、人と人との関係を強くしていく機能があることが明らかになった。

次に、会話が母語話者と学習者との間で行われる場合、母語話者の割り込み発話がこれによってどのように影響されるのかを検討するために分析を行った。この結果、母語話者は学習者と会話するときによく割り込み発話を用いるが、その機能は学習者のターンを妨害するようなものではなく、学習者に情報を提供したり、学習者の発話を訂正したり、先取りしたりするタイプのものがほとんどであるということが分かった。また、母語話者は学習者に、母語話者同士で会話するときと比べると、はるかに多くの視線を向けていることも分かった。これらのことから、母語話者は学習者と会話するとき、学習者に視線を向けて注意深くモニタリングをして、時には割り込み発話を用いながら、学習者の日本語力の不足などによって弱くなりがちな相互交流を補強しようとしているということが結論づけられた。

以上のように、日本語における割り込み発話は、会話の中での話し手と聞き手の相互交流を強め、人と人をつなぐ機能として作用していることが分かった。また母語話者が学習者と会話する際には、学習者の日本語力の不十分さを割り込み発話を用いて補いながら会話を進めていることが分り、母語話者が学習者とのコミュニケーションを円滑に行う上で重要な働きを持つことが明らかになった。

しかるに、日本語学習者のための日本語教材には、視聴覚教材も含めて、割り込み発話を取り上げているものはほとんど皆無に等しい状態である。それゆえ、日本語の会話における割り込み発話の機能を学習者のための教材や教授法に生かすことができれば、今後の日本語教育に多に資することができ、このような割り込み発話の特性を明らかにできたことは、本研究の大きな成果であると考えられる。

本研究の構成

第1章は序論で、本研究の目的やその意義について述べた。

第2章では会話を分析するためのアプローチとして、これまでの言語行為論、会話の含意などの語

用論や会話分析の理論を取り上げて論じた。さらに、日本語の談話研究、会話における非言語行動の研究、割り込み発話をめぐる研究についての検討も行った。

第3章では、先行研究を踏まえ、本研究での方法論について、分析の単位や割り込み発話の定義、分類方法などについて論じた。

本研究で用いた資料はすべて、実際の会話を録音・録画したものであるが、第4章ではそれらの資料の種類や収集方法、会話参加者の背景などの詳細を述べた。また、文字化した資料の記号や凡例も示しておいた。

第5章では、母語話者同士の会話に現れる割り込み発話を、種類や出現数、機能面の特徴、視線行動との関連などから分析し、それに基づいて、日本語の会話における相互交流の在り方について考察した。

第6章では、母語話者と学習者との会話に現れる割り込み発話について、第5章と同様の分析を行った。それをもとに、母語話者と学習者の会話で主に母語話者がどのようにして学習者との相互交流をはかろうとしているかについて考察した。

第7章は結論として、本研究で明らかになったことを概観し、その成果をまとめた。

なお、本研究には別冊として、分析に用いた会話の文字化資料を添付した。

Abstract

The purpose of this study is to clear the interactional functions of interruptions in conversations in Japanese through the analysis of verbal and non-verbal behaviors including eye-gaze of Japanese native speakers and learners of Japanese.

On the basis of tape-recorded and video-taped conversations, five types of interruptions were identified in casual Japanese conversations between native Japanese speakers : 1)early starts, 2)interruptions to take floors, 3)unsuccessful interruptions, 4)cooperative overlaps, 5)simultaneous turns.

Although previous studies focus on interruptions which violate turn of others, many of interruptions in conversations between native Japanese speakers have cooperative rather than obstructive effect. In conversations between native Japanese speakers and learners of Japanese, native Japanese speakers often interrupt turns of learners to help them to speak fluently.

These results lead to the conclusion that interruptions in Japanese conversations play important supportive roles in conversational interaction.

学位論文審査結果の要旨

本論文は日本語の会話において重要な機能を持ちながら、余り本格的に研究されなかった「割り込み発話」に焦点をあて、その機能や種類と、これまで検討されなかった視線行動との係わりを分析し、「割り込み発話」を通して見た日本語母語話者同士と母語話者と日本語学習者のコミュニケーションの特徴を明らかにすることを目的としている。

本論文は発話行為理論以来の言語学を踏まえた上で、「割り込み発話」を分析する体系的な方法を確立するとともに、実際の会話を分析することによって日本語の「割り込み発話」の特性を浮き彫りにしている。

深澤氏は20年にわたる言語学研究から、言語学の歴史を概観し、氏の10年余り携わっている会話分析にはエスノメソドロジーの方法が最適であることを結論づけ、さらに近年盛んになりだして来ている会話分析の先行研究を踏まえて、「割り込み発話」の分析基準を確立している。分析の単位を決めるための「ターン」や「あいづち」などを区別して「割り込み発話」を明確に規定することはもとより、相手の発話中の「割り込み」を「早めの発話開始」、「ターン取りのためのもの」、「差し挟み」、「働きかけ」、「ターンの重なり」の5種類に分け、それぞれに「割り込み」の機能（実際は更に細分化されている）を4つに分け、それらの組み合わせを20とし、更に非言語記号の視線行動とを併せて総合的に分析する方法を試みた。これは、「割り込み」の分類とその機能を組み合わせる綿密な分析であるばかりでなく、かつてない視線行動との統合分析は、エスノメソドロジーによるこれまでの「割り込み発話」分析にはなかった最善の方法であるといつてよいだろう。

氏は金沢大学留学生センターで日本語教師をしていることから、日本語教育に役立つ会話分析をと考え、今回日本語母語話者の日常会話と、日本語母語話者－学習者の日常会話における「割り込み発話」を取り上げその比較を試みた。まず日本語母語話者同士の「割り込み発話」を分析し、その特徴を浮き彫りにするために同じ母語話者が日本語学習者との会話でどの様に変化するかを分析している。本論文では、従来の研究が東西を問わず「割り込み発話」を相手のターンを妨害したり、権力的にターンを奪うマイナスの機能に注目し勝ちであったのに対して、母語話者同士の会話でも相手のターンを継続させ、支援するプラスの機能のものが圧倒的に多いこと、しかも学習者との会話では支援機能の中でも情報提供や発話の訂正、先取りなどの「働きかけの割り込み発話」が殆どであったことなどを明らかにし、従来なかった成果を出していることは評価されるべきであろう。また視線行動との統合分析でも、ターンを取る場合、視線を相手からそらし、ターンを終わる場合は視線を相手にむけることと共に、上記の支援機能の「働きかけ割り込み発話」では、視線を相手に向けたまま行われることを突き止めるなど新しい発見を提出している。

本論文は、研究の緒についたばかりのエスノメソドロジーによる「割り込み発話」の分析方法をほぼ確立したこと、言語学習の過程における「割り込み発話」の機能について新しい知見を提示したことなどを通じて、分析対象が限定されたコミュニケーション場面とはいえ、一定の成果を出していることからますますエスノメソドロジー会話分析が発展する端緒となり、しいては日本語教育に大いに役立つこと等を考え、博士（学術）を授与するに十分値すると審査委員一同は評価した。よって合格と判定する。